

四無礙解について

古 坂 紘 一

よく知られているように、Dharma-pratisaṃvid, Artha-p°, Nirukti-p°, Prati-bhāna-p° という四項目の法数は、わが国では四無礙解、四無礙智、四無礙弁、あるいは単に四無礙、四弁などと呼びならわされて来た。

Har Dayal は *The Bodhisattva Doctrine in Buddhist Sanskrit Literature* (London, 1931) の中で、この法数について詳説し、pratisaṃvid に対応するパーリ語が paṭisambhidā となっていることの理由について次のように推定している。

四無礙解 (paṭisambhidās) は、異った用語の長いリストを掲げている Dīgha-Nikāya の Saṅgīti-suttanta の中に言及されていないということは奇妙な事実である。しかも Saṅgīti-suttanta は初期仏教史の比較的後の時代に属するのでなければならぬ。というのはそれは体系的な教理問答の一種だからである。Khuddaka-Nikāya 所属の Paṭisambhidā-magga (「無礙解道」) も仏教文学の初期の産物と見做すことはできない。そこで、仏教徒は pratisaṃvid という Skt. 語を何らかのパラモン教的な筋から借用し、Pāli 語の著作者がそれを不正確に Pāli 語に訳し [paṭisambhidāとした]¹⁾ということだが、かなりの程度可能性のあることとして論じられよう²⁾。

と述べ、「pratisaṃvid」が古い形をたもっている綴りである、と見做したのである。そして、彼はその pratisaṃvid という用語が、それまでの研究では「理解・知識・分析」等の識別能力として訳出される傾向が強かったことを批判し、それが特に「プロパガンダ (説法) のための完全な知識」でなければならぬことを種々の経論をもとにして論証した。

さて、この pratisaṃvid の二つの接頭語を分析して、『阿毘達磨順正理論』(AJ) は、有余師の説として、prati- は「現前」の意味、saṃ- は「無倒」、vid- は「智」の意味であるという。即ち全体で「現前に無倒に知ること」を意味すると解している。一方、Mahāyāna-sūtrālamkāra (『大乘莊嚴經論』: MSA) では、「各自 (pratyamaṃ) 平等性 (samatām) を了解し、それにもとづいて後に、理解すること (pravedanā) が、一切の疑念を除滅するためにはたらくので、pratisaṃvid と言い表わされる。」と解釈する。そのように、この概念の解釈は、仏教内で必ずしも一様ではなかった。また南伝と北伝の仏典の間でも少しとらえ方がちがっ

ているように思われる。そこで、まず通仏教的に四無礙解がどのようにとらえられていたのか、そのあらましを考えなおしてみたいと思う。

まず注目されるのは、『瑜伽師地論』菩薩地の「菩薩相品」(Bodhisattva-līṅga-ṣaṭṣāḥ)において、菩薩の五つの特相が述べられるが、その際「四無礙解」が菩薩の特徴的な能力にとって極めて重要な要素とされていることである。菩薩の五つの特相のうち、前の四相は、(1) 哀愍 (anukampā), (2) 愛語 (priyavādītā), (3) 勇猛 (vairyaṃ), (4) 舒手恵施 (mukta-hastatā) であるが、最後の (5) 能解甚深義理密意 (gambhīrārtha-saṃdhi-nirmocanā), 即ち深い意味とその構造連関を理解することの本質について、同書では、

(Skt.)

(Tib.)

catasraḥ pratisaṃvidāḥ
tāsām eva cābhinirhārāya
samyak-prāyogikam
jñānam
ayam
bodhisatvānām
gambhīrārtha-saṃdhi-
nirmocanātāyāḥ
svabhāvo
veditavyaḥ/

so-so yañ-dag-par-rig-pa bshi dañ/
de-dag-ñid mñon-par-sgrub-paḥi phyir
yañ-dag-paḥi sbyor-ba las byuñ-baḥi
śes-pa
ḥdi-ni/
byañ-chub-sems-dpaḥ-rnams-kyi
don dan dgoñs-pa zab-mo
ñes-par-ḥgrel-baḥi
ño-bo-ñid yin-par
rig-par-byaḥo/

(玄) 若諸菩薩 四無礙解 及即於彼 無倒引發 正加行智 是名能解甚深義理密意³⁾

四無礙解、およびそれらを引き発すための加行(方便)からなる智、これが諸々の菩薩の能解甚深義理密意の自性であると知られるべきである。

と説明されている。そしてこの第五相は、六波羅蜜のうちの禅定と智慧の波羅蜜に包摂されるという。そのように、瑜伽行派系統の大乗仏教では、四無礙解が菩薩の特徴として必然的に具わるべき重要な徳目または能力、而もその中でも特に本質的な要素として積極的に言表している。

また『十地経』では、四無礙解によって説法をすることが第九善慧地の菩薩の特徴とされ、一々の無礙解によって何を知り、どのように説法をすることが述べられているが、それも四無礙解の価値を高く評価する立場に立つ大乗仏教の見解を示している。その『十地経』の内容は『菩薩地』の「住品」(Vihāra-ṣaṭṣāḥ)において概説されているが、第九地に相当する第十一住をそこでは「無礙解住」(pra-

tisaṃvid-vihāra) と名付け、それを定義して、

その極めて清浄で不動の智慧三昧 (prajñā-samādhi) に依止して広大な智慧 (mahāmati-vaipulya) を得て、他の人々の為に無上の説法 (dharma-samākhyāna) をおこして、諸法の同義語と、意義と、語源と、区分とを弁別する住である⁴⁾、

という。そして此の住の菩薩は

説法 (dharma-deśanā) に巧みで、教説の所作に善巧であり、無量の陀羅尼を獲得し、一切の音声の部分の分析に善巧であり、尽きることのない弁才 (akṣaya-pratibhāṇa) のすべての種類に関して大法師 (mahā-dharma-bhāṇakatvam) となり、そのような種類の法の保持とそれを受けとる能力をそなえていて、およそ菩薩の無礙解 (pratisaṃvid) によって引き発せられたことば (vāc) をもち、そのような種類の法座 (dharmāsana) に坐り、そこにおいてあらゆるところで法を説き、ある限りの法門をそなえ、それによって衆生を理解せしめ、喜ばせる事業に従事する力をそなえている⁵⁾、

と説明される。

さて、四無礙について比較的詳しく説明しているいくつかの文献の中から、各々の無礙解の作用とその対象に関する表現をとり出すと、次の表のようにまとめることができよう。文献名の略号は次の通りであるが、表の中でその略号の右側に大文字で表わした（または／印の左側の）語句は、それぞれの無礙解によって行われる作用を示す。／印の右側は、その作用が及ぶ対象（目的語）を示す。

ABBREVIATIONS

AbhK: ABHIDHARMA-KOŚHABHASHYA of VASUBANDHU, ed. P. Pradhan (Patna, 1967), pp. 418-20

AJ: 阿毘達磨順正理論, 衆賢造・玄奘訳, 大正蔵 XXIX, p. 750 c, f.

AS: ABHIDHARMA SAMUCCAYA of ASANGA, ed. by P. Pradhan (Santiniketan, 1950), pp. 96-7; TH No. 4049; 大正蔵 No. 1605

BBh: BODHISATTVA BHŪMI, ed. by U. WOGIHARA (Tokyo, 1971), p. 258; TH No. 4037; 大正蔵 No. 1579

DCR-1, 2: 大智度論, 龍樹造・鳩摩羅什訳, 大正蔵 XXV, p. 246 a, f.

HS: 品類足論, 世友造・玄奘訳, 大正蔵 XXVI, p. 719 a.

MIn: THE MILINDAPAÑHO, ed. by V. Trenckner (London, 1962), p. 340

MSA: MAHĀYĀNA-SŪTRĀLAMKĀRA, éd. par S. Levi (Paris, 1907), p. 139

PM: PAṬISAMBHIDĀMAGGA, ed. by A. C. Taylor (London, 1905), pp. 88-91

Vbh: The Vibhanga, ed. by Mrs. Rhys Davids (London, 1904), pp. 293 f.

I DHARMA-PRATISAṂVID (DHAMMA-PAṬISAMBHIDĀ)

Pali 1

- 1 PM: PAṬIVID/ dhamma ((saddhā, viriya, sati, samādhi, paññā) indriya, bala; (sati, dhamma-vicaya, viriya, pīti, passa, samādhi, upekkhā) sambojjhaṅga; sammā (diṭṭhi, saṅkappo, vācā, kammanto, ājīvo, vāyāmo, sati, samādhi))
- 2 Vbh: ÑĀṆA/ dhamma, dukkhasamudaya, dukkha-nirodhagāminī paṭipadā, hetu, jarāmarāṇa-samudaya, jarāmarāṇanirodhagāminī paṭipadā, saṅkhārasamudaya, saṅkhāranirodhagāminī paṭipadā; sutta, geyya, veyyākaraṇa, gāthā, udāna, itivuttaka, jātika, abbhutadhamma, vedalla; (kusalākusala-) dhamma
- 3 M1n: KATHĀ / dhamma, amata, asankhata, nibbāna, suññatā, animitta, appaṇihita, aneja

Abhidharma

- 1 AbhK: AVIVARTYA-JÑĀNA / nāma, pada, vyañjana
- 2 HS: 不退智 / 名句文身
- 3 AJ: 無退智, 緣 / 能詮法名句文身
- 4 DCR-1: 無滯, 分別 / 一切名字

Mahāyāna

- 1 BBh: AVIVARTYAṀ JÑĀNAṀ / sarva-dharmāṇaṃ sarva-paryāya
 - 2 AS: AVYĀGHĀTA / sarva-dharma-paryāya
 - 3 MSA: JÑĀNA / nāma-paryāya
 - 4 DCR-2: 通達無滯 / 所說名字言語
- II ARTHA-PRATISAMVID (ATTHA-PAṬISAMBHIDĀ)

Pali

- 1 PM: PAṬIVID / (adhimokkha, paggaha, upatthāna, avikkhepa, dassana) aṭṭha; (assaddhiye, kosajje, pamāde, uddhacce, avijjhāye) akampiyatṭha; (upatthāna, pavicaya, paggaha, pharaṇa, upasama, avikkhepa, paṭisaṅkhāna; dassana, abhiniropana, pariggaha, samuṭṭhāna, vodāna) aṭṭha
- 2 Vbh: ÑĀṆA / attha, dukkha, dukkha-nirodha, hetuphala, jarāmarāṇa, jarāmarāṇa-nirodha,.....saṅkhāra, saṅkhāra-nirodha, bhāsitassa attha, (kusalākusala) dhammesu vipāka
- 3 M1n: KATHĀ / attha, kāraṇa, hetu, naya

Abhidharma

- 1 AbhK: AVIVARTYA-JÑĀNA / artha
- 2 HS: 不退智 / 勝義
- 3 AJ: 無退智, 緣 / 一切法所有勝義

4 DCR-1: 分別 / 總別相

Mahāyāna

1 BBh: AVIVARTYAṀ JÑĀNAM / sarva-dharmāṇaṃ sarva-lakṣaṇa

2 AS: AVYĀGHĀTA / lakṣaṇa, abhiprāya

3 MSA: JÑĀNA / lakṣaṇa, yasya arthasya tan nāma

4 DCR-2: 通達無滯 / 諸法実相

III NIRUKTI-PRATISAṀVID (NIRUTTI-PAṬISAMBHIDĀ)

Pāli

1 PM: PAṬIVID / (dhamme, atthe) byañjananiruttābhilāpa: nānā nirutti

2 Vbh: ÑĀṆA / dhamma-niruttābhilāpa

3 MIn: KATHĀ / nirutti, pada, anupada, akkhara, sandhi, byañjana, anubyañjana, vaṇṇa, sara, paññatti, vohāra

Abhidharma

1 AbhK: AVIVARTYA-JÑĀNA / vāc(ita)

2 HS: 不退智 / 言詞

3 AJ: 無退智, 緣 / 諸方域俗聖言詞

4 DCR-1: 分別莊嚴, 能令人解 / 言辭

Mahāyāna

1 BBh: AVIVARTYAṀ JÑĀNAM / sarva-nirvacana

2 AS: AVYĀGHĀTA / janapada-bhāṣā, anuvyavahāra, dharma-nirvacana

3 MSA: JÑĀNA / vākya; pratyekaṃ janapadeṣu yā bhāṣā

4 DCR-2: 隨其所応能令得解 / 語言

IV PRATIBHĀNA-PRATISAṀVID (PAṬIBHĀNA-PAṬISAMBHIDĀ)

Pāli

1 PM: PAṬIVID / (dhammesu, atthesu, niruttisu) ñāṇa

2 Vbh: ÑĀNA / ñāna

3 MIn: KATHĀ / paṭibhāna, opamma, lakkhaṇa, rasa

Abhidharma

1 AbhK: AVIVARTYAṀ JÑĀNAM / yukta-mukta-abhilāpita, samādhivaśī-samprākhyāna

2 HS: 不退智 / 無滯応理言詞, 等持自在顯示

3 AJ: 無退智, 緣 / 応正理無滯礙説, 自在定慧二道

4 DCR-1: 説, 開演 / 有道理

Mahāyāna

- 1 BBh: AVIVARTYAṀ JÑĀNAṀ / dharmāṇāṃ sarva-prakāra-pada-prabheda
- 2 AS: AVYĀGHĀTA / dharma-prabheda
- 3 MSA: JÑĀNA / jñāna; svayaṃ yat pratibhāna
- 4 DCR-2: 能説 / 一切 (字, 語, 法): 一 (字, 語, 法) 中

これらの法数の順序は必ずしも一定している訳ではない。第一の Dharma-pratisaṃvid 法無礙と第二の Artha-p^o 義無礙の順序は、パーリ仏典では多くの場合逆になっているが、AJ ではその二無礙の前後関係について次のように説明している。——「経では義を先に、法を後にし、諸の対法 (Abhidharma) では法を先にし、義を後にする。法を聴く者〔即ち対法の立場〕においては、先に名〔としての法〕を分別し、既に正しく名を知れば次に其の〔意〕義を尋ねる。正しく〔意〕義を知り終ると、他の為に説こうとする。次に必ず滞ることなく説く智を求めべきである。この次第によって名が先にある。然しこの四者のうち、義の智が最勝である。その他はその助伴であるので、〔経では〕義が先に在る」と。因みに PM でもその論母においては義が先、法が後に掲げられるのに対して、釈説文では多くは法無礙を先に釈説している。また Vbh では後述するように法を因、義を因の果または異熟として説明し、因の法を先に、果の義を後に述べているので、この法数の順序を因と果としての認識対象の発生の順序と解していることが推察される。なお、北伝仏典でも DCR では、その小乗の解釈の場合も大乘の解釈の場合も、義無礙智を筆頭に挙げているが、その理由は同書が義を「諸法実相」と解していることと関連をもつと思われる。

さて、PM では、法無礙を信・精進・念・定・慧の五根・五力、更には七覚支・八正道などの徳目に通達することとしてとらえるのに対し、義無礙を、勝解・精勤・近住・無散乱・見の五義のほか、不信・懈怠・放逸・掉挙・無明という大煩惱地法において不動であることなどの義に通達することと解釈している。いわば、法を徳目とし、義を事実としての種々の心理的状況とする解釈である。

Vbh では、法が苦乃至行の集、苦滅または行滅に至る道、つまり苦または苦滅の因、義が苦または苦滅そのもの、或いは善不善の異熟果であるとされる。法を因、義を果とするのである。しかしまた同じ Vbh において、法が九部経、義が説かれたことの意味であるともいわれる。この解釈は、アビダルマ乃至大乘の解釈にやや近づいている。

一方、Mln では、義を因とし、法を涅槃などとするので、Vbh の義と法に関する因果の対応のさせ方とは逆の関係になっている。しかし Mln では、「四無

礙解の宝をそなえた比丘は衆会に近づくも無畏にして近づき義無礙解を問ふものあらば、義を話すに義を以てする」云々と述べて、四無礙解が問答における自信・勇気を含意することを示唆している。これは大乘の場合とも共通しうる理解と思われる。

ともかく、パーリ仏典では義と法の内容に関する解釈が、因果等の事象あるいは徳目的理念などの範囲の中で揺らいでいたのに対して、アビダルマと大乘の論典ではそれらを一貫して言語の要件としてとらえている。しかも、それらの間では法無礙の法を名辞または概念として解し、特に AJ では名句文身が「能く諸々の所詮の義を持し、及び軌として解を生ずるが故に〔それらを〕法となす」と述べて、いわゆる「能持自性、軌生物解」という、有名な「法」の一般的定義がここでは実に名句文身が法であることの理由として言い表わされている、つまり義を保持するが故に名句文身が法であるという解釈が施される点が注目される。このように名辞の本質が、対象を指し示す点にあるとするのではなくて、むしろ意味を保持するという点にあるとする理解は、仏教の言語観のある側面を示しているのではないだろうか。

なお、アビダルマの HS と AJ では共に義を勝義 (paramārtha) と規定し、他方大乘の諸論典では法を異門 (paryāya: 同義語) または名字、そして義を相 (lakṣaṇa: 特徴) と規定していることも見逃せない。

次に Nirukti-p° 辞無礙解または詞無礙についてはいずれの場合も言語そのものの理解能力として規定しているが、BBh と AS において nirukti をことばの語源 (nirvacana) と規定し、また AJ, AS, MSA で nirukti を諸々の方言 (言い換えれば広義の外国語) のことを意味するとも述べている点が注目される。そのようにいわば語学的な認識が四無礙の一要因とされていたことは、仏教が世界宗教として弘まるために必要であった言語による布教伝道活動を重視していたことを物語っている。

最後の Pratibhāna-p° 弁無礙解または樂説無礙については、BBh と AS は「法の区分を知ること」であるというが、PM, Vbh あるいは MSA の場合のようにこの無礙解は智を智ること (智の智) と言われることが多い。しかしその智の智を規定して MSA では特に自己の説法 (pratibhāna) を知ることであると述べている。また AbhK, HS, AJ によれば、理に応じて説き示すことおよび三昧において自在であることの顕現を知ることである、とされる。BBh などという「法の区分を知ること」も、結局説法による開示の前提としての認識を意味している。

というのは、「菩薩はこの四種の法によって、一切の法を自ら善く完全に覚るようになり、しかも他において〔それらを〕開示 (prakāś) する。それ以上には自ら善く完全に覚ることはもはやない。況んや他に開示するにおいてをや⁶⁾」と BBh で説かれるからである。

以上のようにみえてくると、pratisamvid は単なる「分析」のことではなく、「説法のための完全な知識」であるという Dayal の指摘は正鵠を射ているといえよう。しかし、それは自己の内面的な観察をともなり精神的充実即ち三昧または禪定に基づいた智である、ということを忽せにすることはできないであろう。AS では次のように規定している。即ち

法無礙解とは何かというと、禪定に依拠して一切法の異門において無礙が完全に具わった三昧と般若（及びそれに相応した心心所法）である⁷⁾、

と。義・辞・弁無礙についても同様の説明が行われている。先述の BBh の無礙解住の定義にも「三昧に依止」することが言及された。またアビダルマにおいては特に弁無礙解の一要素が三昧における自在であることとされたのを考え合わせると、四無礙と禪定乃至三昧との間に密接不可分の関係があることは十分強調されねばならないことである。

要約していえば、禪定（三昧）に基づいた四無礙解を身につけて教化活動としての説法を行うことが、仏教者に要請された重要な（大乘仏教では最も重要な）宗教的行為の一つであったといえよう。

1) 以下引用文中の〔 〕内は筆者補足。

2) p. 261.

3) BBh, p. 301; デルゲ版 157b; 大正蔵 30, p. 549 下。

4) BBh, p. 321; デルゲ版 166a; 大正蔵 30, p. 553 下。

5) BBh, p. 353; デルゲ版 183a; 大正蔵 30, p. 561 中。

6) BBh, p. 258; デルゲ版 137a; 大正蔵 30, p. 539 中。

7) AS, p. 96; デルゲ版 113a; 大正蔵 31, p. 691 上。() 内は玄奘訳（大正蔵）による。

（本稿は昭和59年度文部省科学研究費一般研究の研究 (c) 成果の一部である）

（大阪教育大学助教授）